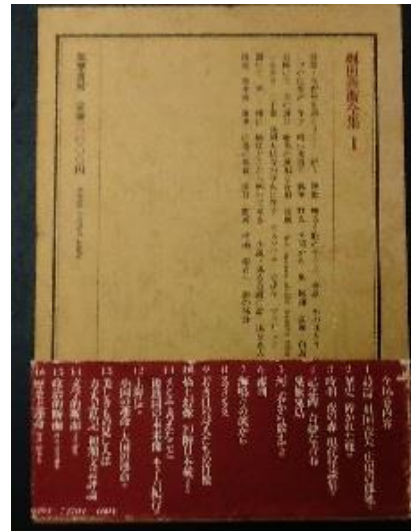
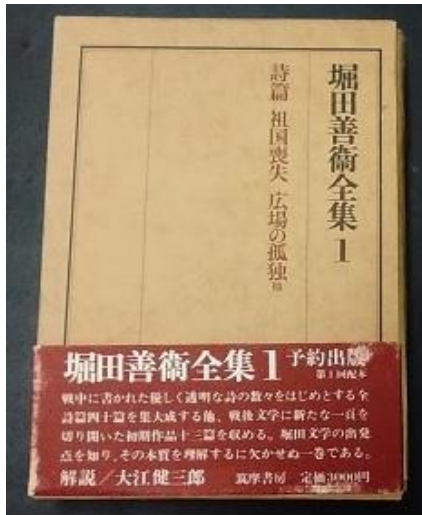


essais ころみ 2019年12月

(再掲) 2019年4月1日 (月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集 (筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年12月2日 (月) 雨⇄曇⇄晴

朝から雨だったが、陽が差してきた。予報では一日雨のはず。気温はまた高め。12月に入ったが、そんな感じがしない。7日は「大雪」。

— 『大阪では・・・』 —

先週うけた中小企業診断士の更新研修で大阪と東京の違いが話にでた。独立した一人いわく、『大阪では仕事できませんね。そもそも仕事が少ないし、それに値切られますからね』。

値切られる…、そうか、今も。昔から、特に企画やデザイン、コンサルといった分野はその価値をあまり感じてもらえないと、当の専門家がこぼす。見切りをつけて東京へ移った人も何人か知っている。

先週金曜だったか、土曜だったか日経の夕刊をみて、えっ?!。トリイホールと應典院ホールが閉館するらしい。数年前に大阪から公的な舞台芸術活動の拠点がなくなり、風前の灯だったが、それもまた…。

8年前に日経の文化欄で紹介されて初めて知った「マルセル・モース」。おすすめ本『マルセル・モースの世界』(モース研究会 平凡社新書)もすぐ買ったが、ずっと本棚の飾りになっていた。

それを先月ようやく読んだ。そして結びの文章に、うなった。すごく大事なことを教えていると感じた。いわく、

個人においては、すべてが芸術になりうる。歩くこと、食べること、休むこと、見ること、聞くこと、話すこと・・・すべてにおいて、ただするのではなく、よくすることが問題になったとき、人は芸術に近づく。

個人の生活を、自分の属する組織を、はたまた社会を、よくしたいと考えた時、そのためには必ず新しいアプローチ、創造が必須。クリエイティビティーの発揮が欠かせないわけだから、まさにアート。

不遜ながら、以前から自分の仕事もアートだと想っている、たまに人にそう言ったりしている。アートであり続けられるよう、芸術から遠ざからないようにしようとおもう今日この頃

2019年12月7日(土)

クレオ大阪東館 「チャレンジマルシェ」 & お茶会サロン

毎年恒例の『はぴマルクレオ』の一面に、今年の「プロ講師になろう塾」受講者の「チャレンジマルシェ」。お天気がわるく、来館者の出足は今一つでしたが、まずは実績を積んだということ。

その後午後4時前から、『“プロ講師になろう塾”つながりお茶会サロン』を実施。2015年の受講以来、初めてという方が参加。こういう事が有り得るので、やる意味あり。



2019年12月9日（月） 冬晴

今日はよく晴れている。師走も中旬に入る。あまりの人の多さに京都からはすっかり足が遠のき、京都の紅葉も逃したが、「フウの木」だけは訪ねるとしようか。

— 想像を絶しつつ、想像することを忘れない —

仕事柄、さまざまな活動、仕事を知る。先週、養護施設を出た18歳から20歳までの女性たちを公的制度のもとで住居支援する人の話を聞いた。具体的に書くには過酷、壮絶すぎて、とても書くことはできないが。

彼女たちの生まれ持った資質はごくごく平凡だったろうと思う。でも育った環境、その環境の中心にいる親や大人の、〈仕業〉、〈悪行〉というか、不可逆的な負の学習を積み重ねさせた大人たちの罪は、深い。

20歳をすぎればその住居を出なければならない。そのためにアルバイトをするが、続かない。続いても、おカネ目当ての〈ともだち〉に、都合のいいように吸い取られている。本人に注意しても、同じことの繰り返し。

話を聞いていて、なんとも切ない。しかし今の時代、いや、昔もか、少なくないのかもしれない。言うこと、やることに目が点になるようなことがあったとして、それだけにとらわれてはダメだなあと感じた。

どうあれ、見聞きする点だけをみてはいけない。なぜそうなのか考えてみる、想像してみる。それは忘れてはいけないと再認識した、想像を絶する話であった。

2019年12月12日（木）

MxA×O代表岩村明子さん企画、「古」と「織」で紡ぐMaterial Art展 at Relay 2019年12月12日～12月14日

地下鉄桜川駅からなにわ筋を南にくんだり、レトロな小さなビル2階にこじんまりしたギャラリーあり。開展一番のり、ドアを開け、ぱっと目にとびこんでくる、白い空間。冬にあって、温もりある印象。

居心地が良すぎて、なんと2時間も長居。知り合ったのはほんの昨年。それでも何か通じるものがあり、自分のこと、まわりのこと、社会のこと、いろいろを対話。よい時間をすごしました。



2019年12月16日（月） 今日も冬晴

やはり今年は暖冬傾向、今日も日中は15度まで上がる予想。もうすぐ冬至だけど、季節のメリハリがなくなってきた。

ー 小さい、少ない、合間、すき間、周縁、背景… ー

秋の初めから師走上旬にかけてはイベントが多い。仕事で知り合った人たちもいろいろと活動、すべての参加は無理だけど、〈歩く〉ことにもなるので、ちょこちょこっと、出かけ

12日の『「古」と「織」で紡ぐMaterial Art展』はレトロなビルの一室であった。案内ハガキの左上一画に小さな文字で、【ドレスコード/文化芸術書籍】の見出し。

4行ほどの説明文を読むと、来訪者は書籍の紹介か、展示してある書籍と交換か、はたまた寄贈か。寄贈の場合はメッセージを添えてほしい、『チャリボン』を通じて寄付をするとのこ

そういう意味のドレスコードかと合点。ちょうど今年は本を見なおしていた。『ゴッホ』と『ゴーギャン』の小画集を寄贈することにした。それぞれにメッセージをハガキに書いて挟み、持参。

聞くと、このドレスコードを読んでいる人が少ないらしい。「ちゃんと読んでいただいたんですね」と言われて、そう、最近ほんの数行でも読むのを面倒に感じる人が増えているよう、と話し合った。

ほんの数行の中に大事なことが書いてあったりするのに、それをスルーしてしまうのは、ものごとの良否どちらも見逃すことといえる。会話でもそれは同じ。一言が、その人の本質、価値観を表すこともある。

神は細部に宿るといふし、大きな仕事も小さな仕事も小さな仕事の積み重ねとを感じる。小さい、少ない、合間、すき間、周縁、背景、そういったものが本質的な価値を下支えしているのではないか

2019年12月26日（木） 雨

昨日から一転、雨。それでも気温は高め。お昼、コートなしで外へ出た。年末感がイマイチわいてこない…。

ー 自業史的〈今年の収穫〉ー

年末になると新聞でも今年を総括する記事が並ぶ。日経の文化面には各分野の専門家が「今年の収穫」を挙げていた。

今年の収穫…か。さてわたしにとって今年の収穫は何だったろう。一年を遡り、またこの年末に返って、初めと終わりの、あのこの2つの事にあるといきついた。

一つ目の年初のことは、これは何と表現していいか、とにかく、自分の仕事と人生において、“こういうシチュエーションに出会えて、経験できるとは…！”。人とのかけがえのない関係性を感じる事ができたのは本当に幸せなことだった。

もう一つがこの12月初めのことだった。郵便受けに白い封書。うん？ 最初はピンとこなかったが、“ああ…逝かれたんだ”。封をあける前からわかった。2001年から交流が続いた方のご家族からだった。

実際には一度も会ったことのない先達の方と2001年以来、交流を続けていた。ご家族はそのことを初めて知られて、わざわざ便りを寄せてくださった。温かい文面であった。

一つ目のことは、なにげな勧めたことが発展して、〈書く〉から〈書き合う〉につながった。そして、互いに十分通じ合っているつもりだったのに、まだまだ深いところで通じ合うものがあると気づくのだった。

2つ目のことも、間は空きながらも18年間続いた文通が、家族を動かしたのだった。2001年わたしの出したハガキに思いがけず返信をいただき始まった交流。ここに至る展開に、“こういうことがあるんだなあ…”。

大げさかもしれないが、〈書く〉、〈書き合う〉ことは、生きる意味を教えてくれる可能性を秘めている。そう気づき、また実際に経験できたことが今年の最大の収穫だった。また少し蓄えができた2019年でした。